

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 6号

12月25日(水)

【岐阜】

岐阜第一高等学校

レクイエムのエチュード

「あれ、俺なんか忘れてないか？」

糸貫高校演劇部の高坂太朗は、部室に行っても勇人以外の後輩たちが誰も相手にしてくれないと不満をこぼす。自分に平気でぶつかってくるわ、エチュードでは無視されるわ……。もしかして俺、先輩としてみえてない？

中央に浮かび上がった高先輩の姿と、「行ってきまーす。…あっ」のフレーズが何度も繰り返されることに違和感が拭いきれないまま幕が上がリ、部室の一部を切り取ったように再現された舞台装置があらわになった。背景の壁を台形にすることによって舞台と客席がシームレスになり、私たち観客も部室にいるような臨場感を生み出す効果があった。また、なかなか家から出られない高先輩の孤立感や閉塞感が、サスを徐々に絞ることで表現されていた。

観客は、後輩たちが部室に入っても先輩に挨拶をしないことや、先輩だけが制服のままにいることなどで違和感を募らせていく。動き回る後輩たちを先輩の方が避けたり、先輩が机が持てなかったりした演技が、後から考えれば、先輩の正体につながる伏線となつてうまく作用していた。

台詞回しだけでなく動きで笑いを誘ったり、あえて突っ込みを入れずに面白さを生んだりするなど、観客を飽きさせない工夫が随所に見られた。また流行語やダジャレなど、誰もが知っているであろう内容や表現を組み込むことで、幅広い年代層に親しまれる劇となっていた。

孝義が勇人を正気に戻すために始めたレクイエムのエチュードは、後輩たちの仲違いへと発展してしまう。それを止めるために高先輩が後輩たちに発した声が図らずも勇人以外に聞こえ、それをきっかけに、すれ違っていた部員がひとつにまとまった。しかし後輩たちが先輩の声を聞いたのはその一回きりで、それまで先輩の姿と声を認識していた勇人ですら二度と先輩を知覚することはなくなってしまう。

高先輩が結果的に成仏できたか否かについては講評委員の中でも意見が分かれた。走馬燈のように劇中の台詞が次々とよみがえる場面や、先輩自身が自らの死に気付いていく過程が物語の途中で何度か描かれていたことから「成仏できた」とする意見があった一方、高先輩にとっての心残り自体は解決できていないため「成仏できてない」という意見も出た。

最後のイスの数が先輩の分も含めて5脚あったのは、高先輩の成仏を信じる後輩達の、高先輩の存在した証を残しておきたいという優しさの現れではないかという意見もあった。しかし「成仏していない」とするならば、残されたイスは高先輩の心残りがまだ存在しているというメッセージとも捉えることができる。

エチュードをテーマにすることで日常感や現実感が際立っていた。その中に非現実的な高先輩という存在を置くことによって先輩について、笑いを誘われつつも疑問を持ち、その正体を考えさせられた。この劇を通して、観客である私たちが普段の生活の中でお互いに目には見えない何らかのすれ違いがあることを考えなくてはならないと伝えたかったのではないだろうか。